

■ 小説『春の夢』に登場するキンちゃん、ヤモリではなく蜥蜴ですが、「釘が刺さったまま生き続けるヤモリ」が登場する昔話を紹介します。

## 〈原文〉

先年此板をうち付たる時節に通りかゝり、  
釘につらぬかれたると見えて、

俗にいふ宮守虫真中を釘にさし通され、

(中略)

さるにても廿五年の月日、

何としてかかく生ながらへぬらんとよくく見れば、  
壁に行通うたる道とおぼしく一筋に跡あり。

此雌雄数年の間喰物を運び喰せたと見へたり。

(三河吉田 西村白鳥 輯、林自見 校『煙霞綺談』卷之二「宮守虫喰物を運び」より抜粋。  
『日本随筆大成』第4期第4巻 吉川弘文館、1975年刊所収)

## ～要約～

傷みが激しくなった雨よけ板を取り替えてみると、25年前に板を作った時に釘で打ち付けられたと思われるヤモリがいた。板に一筋の跡があることから、つがいのヤモリが餌を運んでいたおかげで、このヤモリは釘が刺さったまま生きていたようである。

## ●「蜥蜴」のエッセイについて

蜥蜴のエピソードが、現実のことであるのかどうかは、明かさないのでおきたい。私は、『春の夢』を書く以前に、『蜥蜴』というエッセイを書いているが、エッセイも、私にとっては、ときに短い小説であったりもする。

(宮本輝全集「第四巻 後記」  
新潮社、1992年刊より抜粋)

## ●『春の夢』の主題について

もしかしたらこの私の体にも、死ぬ程の苦しみを味わってまでも断じて引き抜いてしまわなければならぬ太い錆びた釘がささっているかもしれない。釘を引く思いなのである。釘を引く抜かれた瞬間の蜥蜴の激痛を思うと、自分は波風を立てずこのままそつと生きていようかと考えたりする。だが人生には、きつと一度はそうした荒療治を加えねばならぬ節が、誰人にも待ちかまえているような気もするのである。

(「蜥蜴」二十歳の火影より抜粋)

「釘が刺さったまま生き続ける蜥蜴」は、本作品で誰しもの印象に残る衝撃的な光景です。それゆえ本作品では「蜥蜴」がシンボリックなイメージとして捉えられがちですが、物語を読み進めていくと「蜥蜴」そのもののインパクトと同じくらい、「釘」が意味するものの力強さが訴えかけます。